

～未来を見据え、主体的に生き抜く児童の姿をめざして～

【学校・団体名】 岩国市立灘小学校

【役職名・氏名】 校長 福本 稔

1 はじめに

社会の変化が加速度を増している時代に、求められている学校の姿とはどのようなものであろうか。人工知能（AI）の発達、情報化やグローバル化が進展する社会の中で、子どもたちは自分のよさや可能性を認識するとともに、他者を尊重し、多様な人々と協働しながらよりよい社会を築いていかなければならない。次代を切り拓く子どもたちに求められる資質・能力として、自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身につけることの重要性が指摘されている。

本校では、令和2・3年度の2年間は「プログラミング的思考の育成」に視点を当てて授業改善を行って行く中で、論理的思考力や問題解決能力、想像力などを育みつつ、自分の考えを豊かに表現できる子どもの育成をめざしてきた。また、令和4・5年度には、灘中学校区においてキャリア教育の推進に取り組み、「未来を見据え、主体的に生き抜く児童・生徒の育成」という研究主題のもと、基礎的・汎用的能力を育む授業づくりについて研究に取り組んできた。

本校のこうした研修成果を踏まえ、今年度は校内研修の研究主題の副主題を「見方・考え方を育む授業づくり」とし、研修を推進しているところである。

2 今日の課題から

令和5年度全国学力・学習状況調査結果の分析を行った結果、国語科では「目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること」、算数科では「伴って変わる2つの数量が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさの求め方と答えを、式や言葉を用いて記述すること」などに課題があることが分かった。ともに、既習事項を生かしながら見方・考え方を働かせることが十分にできておらず、その上で考えを述べたり説明したりすることに苦手意識をもつ児童が多いという傾向が見られた。

また、児童質問紙調査結果から「自分にはよいところがあると思うか」や「将来の夢や目標を持っているか」という問いに対して、肯定的回答が全国平均値を上回っていた。自己肯定感が高く、前向きに学校生活を送っている児童が多いことが見受けられる。

しかし一方で、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思うか」という問いには「当てはまる」と回答する割合が全国平均値を下回っており、地域社会とのつながりを大切にしたい取組により力を入れていく必要があると感じた。また、「自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいるか」という問いに対する肯定的な回答も全国平均値を下回っており、自ら主体的に課題を追求したり、情報収集してまとめたりすることに課題が見られるという実態も掴むことができた。

これらのことをふまえて、経営方針の3つの柱を軸とし、学校・地域・家庭の協働の中で、児童が未来を見据え、主体的に生き抜こうとする姿をめざしていきたいと考え、本主題を設定した。

3 3つの経営方針の柱を軸とした取組

上述のことを踏まえて、今年度の学校経営方針の柱として、以下の3つを掲げている。

- (1) 児童一人ひとりを大切にし、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を統合的に育てる。
- (2) 地域の特性やよい校風を生かし、家庭・地域とともにある学校づくりを推進する。
- (3) 個々の教職員のライフステージに沿った資質向上を図るとともに、教職員集団としての高みをめざす。

ここでは、それぞれについて取り組んできた実践について紹介する。

- (1) 児童一人ひとりを大切にし、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を統合的に育てる

○確かな学力

前年度まで研修してきたキャリア教育の取組の共通理解を図る。

- ① 人間関係形成能力→他者とつながろう
- ② 自己理解能力→自分を見つめよう
- ③ 課題対応能力→課題を追求しよう
- ④ キャリアプランニング能力→将来とつながろう

これらは、学習の振り返りをする際の視点として活用していくこととした。**他者**、**自分**、**課題**、**将来**のキーワードを各教室に掲示)

また、高校まで引き継いでいくキャリア・パスポートに加えて、小中合同で取り組んできたキャリア・ファイル（ポートフォリオ）についても、今年度も各学年で子どもたちの学びの足跡を残していくことを共通理解した。

各教科の「見方・考え方」についての研修

講師を招聘し、各教科の見方・考え方について学ぶ機会を設けた。授業をする際の視点や、実践事例から、既習事項を生かしながらか見方・考え方を育んでいく手法について学ぶことができた。

単元は横断的・縦断的に組まれているにもかかわらず、子どもたちはそれらを十分に意識することができないまま、それぞれの単元ごとの学びで終わってしまう場合も少なくない。見方・考え方を働かせることによって、これまでに学習した既習事項を生かしたり、つなげたりしながら、学びに向かう力を育てていけると考えている。そのためには、授業を行う上で教師がそれを意識して意図的に子どもたちに投げかけ、価値づけていく必要がある。各教科における見方・考え方を学ぶ機会を得たことは大変有意義であったといえる。



ICT機器の活用についての体験型研修

4月から新しく導入された学習支援アプリについて、ICT担当を中心として研修を行った。基本的な操作の仕方や、協働学習の場での効果的な活用例等、教職

員一人ひとりが実際に操作して体験する活動を通して、授業に取り入れるメリットを実感し、教職員が抱えていた不安や抵抗感を払拭することができた。

個別最適な学習の場を提供するにあたり、担任はリアルタイムで子どもたちの作業や学習経過を把握することができ、児童の取組を即時に価値づけることもできるので、机間指導に割いていた時間を個別支援に充てることが可能となった。

また、協働的な学習においては、ペアやグループで同じシートを同時に作業・編集することができるため、質の向上や時間の短縮など、学習支援アプリがもたらすメリットは多くあるといえる。



【協働学習にも生かせる、学習支援アプリのモニタリング機能】

○豊かな心

保護者だけでなく地域の方にも参観を呼びかけ、毎年6月に人権参観日を設けている。道徳科や情報モラルに関する内容など、各学年の実態に合わせて取り扱う物は異なるが、参観後にはアンケートを実施して参観者の意見や思いを知る貴重な機会にもなっている。

参観者を対象とした事後アンケートからは、以下のような感想が寄せられた。

- ・役割演技をして動作化することは、幼児期にも経験があり、1年生がスムーズに内容を理解したり想像したりするために必要だと感じた。
- ・一人ひとりがしっかりと自分の意見をもっていて感心した。相手の立場に立って気持ちや考えを学ぶよい授業だった。

○健やかな体

カラダweekの開催や、体を動かす活動の紹介

体育委員会の児童が中心となって、運動量を増やすための取組を行った。体全体を使った遊び4種類を、4つのブースに分かれて行う形で、子どもたちはスタンプラリーカードを持って参加した。新体力テストの

結果から、本校児童の課題でもある柔軟性や巧緻性の向上をめざすメニューを中心に、講堂にて1週間取組を行った。子どもたちは積極的に参加し、汗をたくさんかきながら笑顔で取り組む姿が見られた。

また、保健委員会が提案している生活リズムチェックカードでは、家庭において体を動かす機会をもてていないという傾向が見られた。そこで、家庭でも気軽に行えるメニューを考案し、講堂で全校の子どもたちに体験してもらう場を設定した。けんけんぱ、風船キャッチボールなど、時間や場所をとらずに楽しく遊べるメニューが多く、日常生活に運動を気軽に取り入れられるよう、家庭に働きかけた。



(2) 地域の特性やよい校風を生かし、家庭・地域とともにある学校づくりを推進する

新入生サポートボランティア

新1年生が学校生活に慣れるまでには時間を要する。児童はもちろんのこと、新しい環境に戸惑いや不安を抱えている保護者も多い。そのため本校では、地域の方が、登校してきた児童の荷物整理の補助やトイレ指導など、担任一人では十分に行き届かない個々へのサポートをしてくださっている。困っている子どもたちへ多くの手を差し伸べることができ、児童も保護者も、安心して学校生活をスタートさせることができると大変好評である。

校外学習ボランティア

校外学習では、徒歩での地域学習や、バスでの社会見学などに、地域の方も同行して子どもたちの安全管理や学習のサポートをしてくださっている。

地域学習では、ボランティアの方は地の利や地域の人材情報をよくご存じなので、子どもたちへのアドバイスも豊富で、大変有意義な活動を行うことができた。2年生の社会見学では、班ごとに移動して動物園職員へのインタビュー活動を行ったのだが、担任だけでは移動範囲が限られてしまうところをボランティアの方がおられることで児童の希望にそった広範囲にわたる移動が可能となった。低学年だったためトイレや迷子の心配もあったが、ボランティアの方のお陰で担任の仕事も分担でき、子どもたちの健康や暗算に十分配慮

して活動を実施することができた。



授業サポートボランティア

1年生では、昔の遊びを体験する授業で、コマ回しや竹馬など、地域の方が遊び方を指導してくださったり、手作りのおもちゃを持参してくださったりと、交流を通して楽しみながら学びを深めることができた。

2年生では、生活科でおもちゃ作りをする際に、ノコギリやキリなどの危険な工具を使った作業を担当してくださった。2年生では取り扱うことが難しい工具であるため、作業が限られてしまうところを、ボランティアの方のお陰でより高度で丈夫なおもちゃをつくることができた。

高学年では、家庭科の実技の授業で、ボランティアの方のサポートをいただいた。ミシンを使ったエプロン作りや調理をする場面で、安全管理や、困っている児童へのサポート等で力を貸していただいた。

細かいところまで目が行き届き、授業がスムーズに流れるだけでなく、子どもたちが安心して楽しく参加することができている。



学校運営協議会の方と教職員による熟議の場

夏季休業中には、教職員と学校運営協議会の方で集まって熟議の場をもった。それぞれのニーズや課題、思いを出し合うことで、普段交流の機会を得ることが難しい中、よりお互いを理解し合える貴重な時間となった。

学習活動を行う中で、教員だけでは十分な情報収集を行ったり、施設や人材とのつながりを確保したりすることには限界がある。しかし、学校運営協議会の方々と話し合う中で、あちこちにパイプがあり、相手方も学校の役に立ちたいという思いをもっておられることも知れた。本やインターネットに情報を頼るばかりの学習ではなく、地域の人材をゲストティーチャーとして招いたり、実際に施設に足を運んで目で確認したりすることで、教材の価値も高まり、生きた学習になる。

子どもたちにとって、地域を知ることにより自分たちの住む町に愛着をもてるようになるだろう。



(3) 個々の教職員のライフステージに沿った資質向上を図るとともに、教職員集団としての高みをめざす ちょこっとお役立ち研修(ミニ研修)の実施

教職員からあがった声で企画され、今年度から新しく始まった取組である。年齢や経験年数に関係なく、その先生の特技や得意分野を紹介し、全体にシェアする形の研修で、月に2～3回の頻度で30分程度の時間で実施される参加希望制の研修である。

4月には、「五者の心」や学級経営など、新しい学年がスタートするにあたり、教師の大切な心構えや、学期はじめの学習環境作りについての講義を行った。

5月には、教師自身の意識改革についての講義を行った。「1日の1%を変えると、人生の100%を変えることができる」ということについて、1日15分(1日の1%にあたる時間)自分にかかる時間を作り、何か一つ決めて取り組んでみようという話を受け、日々の取組について改めて考え直す機会となった。

7月には、若手教員が児童役、ベテランの教員が先生役となり、水泳指導の体験型研修が行われた。本校には、コロナ禍で水泳の授業が中断されていた期間に採用され、指導の機会に恵まれなかった教員もおり、実際に指導の仕方を見たり聞いたりして実地研修に参加できたことは大変役立ったという声も聞かれた。また、校長による「算数の授業づくり」についての講義では、なぜ算数の授業をするのか?という問いに始まり、実用的・陶冶的・文化的な意味があること、数学者の言葉や自身の経験もまじえながら、算数・数学の奥深さやおもしろさについて知見を深める貴重な機会となった。

今後は若手教員が講師となり、児童が意欲的に活動する学習支援アプリの紹介や、業務改善に役立つパソコンスキル等、教職員自身のニーズに応える研修と、教職員間の連携を軸にしたOJTを推進していきたいと考えている。



4 おわりに

令和6年度全国学力・学習状況調査において、児童質問紙調査の結果から、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の項目では肯定的な回答が見受けられた。1で述べたような5年間にわたって積み重ねてきた研究を経て、主体的に学びに向かう児童の姿が育成されている様子がうかがえる。

また、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の項目では全国平均値を上回る回答が見られ、地域の方々との交流の中で、地域への愛着を感じながら、何事にも前向きに取り組もうとする心が育ってきていることを実感できた。

以下のデータは、令和5年度後期と令和6年度前期の学校評価アンケートの結果を比較したものである。



今回の実践研究により、学校・家庭・地域の連携協働による取組が、子どもたちの学力向上や心身の成長に大きく影響を与えていることが分かった。データの比較からも分かるように、開かれた学びの場を設定し、地域や家庭との連携を生かした取組を展開することが、ウェルビーイングな学校づくりにつながっていることが明らかになった。

本校がめざす「ウェルビーイング」な学校とは、子どもたちが「通いたくなる学校」、保護者が「通わせたい学校」、地域の方が「訪れたい学校」、教職員が「働きたい学校」である。

そのためには、児童間、児童と教職員、教職員間をはじめ、すべての人同士のコミュニケーションを重視し、協働性を高めることで、何事にも前向き、積極的に取り組むことのできる学校づくりを『チーム灘小』としてめざしていきたい。